

鹿児島県大島郡沖永良部島 テッポウユリの球根栽培

鹿児島県農業試験場

小林 正 芳

1. 沖永良部島の概況

沖永良部島は鹿児島県の南方536 kmにある島で、周囲は49.3 km、面積は94.5 km²で和泊町、知名町の2カ町がある。海岸線は屈曲が少なく、周囲は珊瑚礁でとりかこまれ、年平均気温21.6°C、年平均降水量は2,077 mmで湿度も79%と高く、高温多湿の亜熱帯気候である。

この島で輸出、国内向けのテッポウユリの球根の生産が行われているが、栽培の歴史も古く、今年で70年も経過して、年とともに増産の傾向がみられ、昭和47年産球根の販売額は5億4千万円に達している。

栽培地の地層は古生層であり、その大部分は琉球石灰岩(珊瑚石灰岩)で覆われている。古生層は大山の頂上に新村粘板岩層が、手々知名の北方と国頭附近に大畑砂岩層が、いずれも小範囲に露出している。琉球石灰岩は古生層を覆い、島の大部分を占め、国頭礫層は琉球石灰岩の上部を覆い、島の山頂附近まで分布している。国頭東北海岸その他には石灰質(有孔虫遺骸その他よりなる)の砂からできた砂丘がある。

火成岩は和泊町内城を中心に、小範囲に花崗岩が露出している。

土壌は琉球石灰岩、国頭礫層、古生層、花崗岩を主要母材とした土壌からできており、土性は花崗岩土壌を除いていずれも重粘な土壌で、石灰岩土壌は腐植に富んでおり、他の土壌は少ない。土壌の反応は石灰岩土壌は中性から微アルカリ性で、他は強酸性が多く、国頭礫層に由来する土壌の反応は、いずれも強酸性で下層土が強い。

しかし表層土は石灰分に富むものがみられるが、これは前記海砂(海岸に分布する石灰質の砂丘砂)をユリの生産者が投入する習慣があるための影響と思われる。古生層の場合も同じである。

この習慣は基盤整備等で下層土が上に出たとこ

ろでは、土性が強酸性となりユリの生育にも悪いが、海砂の客土は土壌反応の矯正だけでなく、同時に重粘な土壌の理学的性質の改善に役立ち、塩基の流亡の多い地方では、その効果に持続性があるので都合がよい。最近では、この習慣もなくなってきている。

以上のような土壌でユリが栽培されているが、重粘な土壌ではユリの球根のしまりがよく、温暖な気温と多い雨量で、良質の球根が生産されている。

昨年は4,600万球、5億4,000万円の生産になっているが、植付が9月下旬～10月下旬、収穫が6月で台風常襲地帯であるこの島で、台風期をさけた防災作物として、今後も安定した生産が続けられるであろうが、これまで生産が伸びるには、多くの苦難を乗り越えて今日まできている。

2. ユリの栽培

栽培されている品種は主にジョージア、ひのもとであるが、優秀な品種の量産と品質の良い球根生産が、今後の課題であり、また沖縄県復帰にもなう産地のあり方も、検討しなければならなくなってきている。

現在、沖縄県では沖縄本島、久米島、伊計島、瀬底島、宮古島、石垣島などで生産が始まり、48年産は150万球の出荷が見込まれている。品種も今後は地域に適應した品種の導入が必要とされる

栽培方法の概要

- (1) 種 球 前年の9月にりんべん繁殖によって生産された種球を使用する。
- (2) 植付時期 9月下旬～10月下旬
- (3) 施肥方法 全量元肥方式(植付時期)、全量追肥方式(12月下旬)
- (4) 施肥量 15:15:15(10a当り成分量)
- (5) 10a当り植付球数 ジョージア…13,000球
ひのもと…18,000球、床巾1.2m、通路0.6mであるが、機械利用の場合は、床巾1.0m通路0.5mとし、トラクターで床作りする。
- (6) 除草剤 シマジン、10a当り150g、
植付直後、12月下旬、3月
- (7) 取 穫 5月下旬後半から7月上旬前半まで。
- (8) その他 葉散、摘蕾、病株等抜取りの作



業を徹底する。

3. 省力栽培の普及と問題点

このような栽培で総面積（鱗片繁殖面積を含む）700haで抽苔株数1億5,000万本はあるかと思われるが、球根生産が目的であるので摘花、摘蕾されるので花はほとんど見られない。

面積の増加、労力の不足、基幹作物サトウキビとの関係から省力化が進み、各作業が省力されてきた。

植付時の省力

- (1) 種球の消毒（従来通り）
- (2) 施肥の省力 慣行性肥料による全量元肥、全層施肥により追肥作業の省力。
- (3) 植 付 広い面積ではトラクターによ

る作条、覆土が可能になった。

- (4) ダイジストン根の施用 アブラムシ、球根ダニの防除のため1球18球直下施用、このため栽培期間中、アブラムシの防除薬散布が省力化された。
- (5) 除草剤の利用 除草作業の省力。

摘蕾作業の省力

摘蕾剤の利用「摘蕾剤ブルー」の散布により摘蕾作業の省力。

収穫作業の省力

トラクターに掘取り機をセットし掘取り作業を省力。

以上が主な省力作業であるが、こゝで問題となってきたことは、あまりにも省力化が進むと、農家が畑に入る回数が減り、病害等の早期発見、特に球根で一番恐ろしいウイルス病の抜き取り、優良母球の選定等大切な日常の注意がおろそかになり、省力化作業体系の普及にとまなう大きな弊害として、球根生産では畑の見まわり回数の減少が、大きく品質に影響してくることは事実である。

いくら省力されたからといっても畑の見廻り、作物の観察は必要であり、省力化対策が惰農育成対策とならないよう指導することが、今後の大課題ではなからうか。

アジア米（コメ）貿易基金が発送

国連アジア極東経済委員会（エカフェ）東京総会は、去る4月19日午後本会議を開き、「アジア経済同盟」と「アジア米（コメ）貿易基金」の両協定案に関係諸国が署名した。

アジア経済同盟は5カ国、アジア米（コメ）貿易基金は3カ国の署名があれば発動する。両協定は今後エカフェ域内の貿易拡大に大きな役割を果すことになると思われる。

アジア米（コメ）貿易基金は、米の需給を円滑にするため1969年以来、専門家、関係各国政府間協議会を開いて検討した解決策の一つである。

エカフェ域内の開発途上国は、国際金融機関や先進諸国から無償の援助や長期低利融資による総額5千万ドルをきょ出してもらい、関係各国の政府へ

スで米の延払い取引（期間5年以内、金利年7.5%）を促進しようというもので、年間取扱い量は20万吨と想定しており、基金の規模は利子余裕金の投資などによって、10年後には8,500万ドルに増える見込である。

米国からの農林水産物輸入額

昨年は53.8%と急増

農林省は去る4月28日、47年度の米国からの農林水産物輸入の額は27億3,996万7千ドルに達し、前年度を53.8%も上回ったと発表した。

なお工業製品をも含めた米国からの総輸入額の伸び26.3%を大きく上回っており、これに伴い米国からの総輸入額に占める農林水産物の割合も、46年の35.7%から47年度は43.5%に増大した。